

## 旅客索道の知識 石田美喜藏

現在の旅客索道に就いて十月號に三重縣の一實例を挙げ、續いて其の索道構造が現今如何に技術的に發達してをるかを解説して一般參考知識とする前號の續である。(編者)

### 非常制動装置及電話

索道車室には非常制動装置及電話装置が取付けてある。制動装置はイマージエンシースキッチで客車進行中若し線路に故障あれば乗客は車室内の此装置の把手を半轉するに忽ち其瞬間に停車場の電動機は止轉し、同時に電氣ブレーキは働き曳索は進行停止し隨がつて客車は停動靜止する、其間僅かに半秒を要するのである。

各客車各停車場間に電話の連絡装置をしてあるから線路中のどの客車からも停車場へ電話で話が出来る。

山下停車場より『モシモシアナタは三號客車ですか、私は山下停車場ですか、アナタの御客に岡崎さんと云ふ方がありませんか』

三號客車『ハイハイ居られます、岡崎さんに電話に出て貰ひます、一寸御待ち』

岡崎氏『私が岡崎ですか何か御用で……』

山下停車場『御伴の西川さんはココでアナタを待つて居られますサヨナラ』

……

峠驛『モシモシ十號車さんアナタの御客さんに誰かココの待合室に傘を忘れて置いた方はありませんか』

十號車『ハイあります、次の車で寺前驛へ直ぐ届けて下さいサヨナラ』

此通りで電話は明快自由に掛るから他の交通機關には無い通信上の便利がある。

### 車室 (ケージ)

車室は二人乗、四人乗、八人乗、十人乗、二十人乗等々大小いろいろある、之れを二分間毎又は一定の間隔に隨意に發車し乗客の繁閑に應じて車数を調節する。但し交走式だご二臺きりである。

車體は全鋼式オールスチールで優美高尚なる事、夜分は明るい電燈を點じ又はイルミネーションが出来る。

二三分間毎に發車する事故御客を待たす事なく、而して輸送量も隨分大にして、假りに二十人乗客車二分毎に發車するにせば一時間三十回片道實に六百人、往復一千二百人を運べる。

### 電氣押送装置

交走式(所謂鈎瓶式)の旅客索道は前述の通り客車は曳索に括りつけてあるのだから停車場内の操縦も簡單でよいが之れはケーブルカー同様線路が長いと待つ時間が多く掛かり、客車の大なる割合に輸送量は制限さるゝ不便があるから、距離大にして先づ二千呎以上位になるに循環式索道にせねばならぬ。スルト停車場に於て客車は曳索を放ちレールに懸かる、其間に御客は乗降するのである。そのレール上に掛かつて居る客車は電氣押送装置によりて操縦推進される。

### 停車場

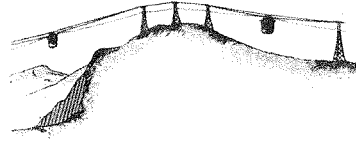
上部に起動停車場を置き原動機を据えて曳索を循環的に曳進せしめ、下部に緊張装置を設け二本の曳索の張度を調節せしめる、而して兩停車場に於ては此等の装置を地勢の許す限り地下室又は密閉室に置き停車場をなるべく靜肅にせしめる。

停車場に入りたる客車はその入口に設けたる開放装置の働きに依り握索機は自動的に曳索を放ち走車は懸吊レール上に來り車室は下車ホーム上に靜止す。スルト乗客は車室より降りる。電氣押送装置は客車を押送し來りて車室を乗車ホーム上に置く御客は乗車す、電

氣押送装置が客車を押進するに停車場出口にある握索装置によりて搬器の握索機は働き曳索を握把する、勿論乗客の繁閑によつて發車數を増減調節し、込み合ふ時は停車場に多くの豫備客車を置く故御客の乗り降りは混雜せぬ、而して閑な時には豫備客車を側線レール上に入れて置く、斯くて停車場の整理は簡單に行わる。

鐵 塔

支柱即ち鐵塔は圖示の如き形狀にして岩丈なる鋼鐵構造で基礎コンクリートの上に建てられる、支柱には避雷設備を爲し電話線及イ



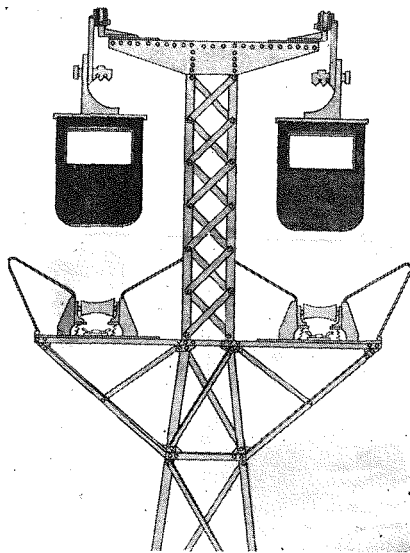
マージェンシー電線を取付く、支柱は地勢により高低種々あれども概して旅客索道にては支柱はなるべく低くし客車をして低空を往復せしめる。

暖房装置

旅客索道の客車は空中を進行するもの故山河の景色を見下ろし羽化登仙の感あり實に壯快である、殊に夏は靈氣窓外より入り清涼言ふべからざるものあれども冬は寒さを覺ゆるから車室内には新式のホットエアーシステムの暖房装置を施設し嚴寒も雖も春暖の温度を保たせる、故に乗客は動く温室内に靜坐して大自然の植物園を俯瞰し得るのである。

避雷設備

三線式及單線式共客車自體、鐵塔、ロープ諸機械及停車場を始め各建造物に對する避雷装置は二重にも三重にも設備してあるから劇雷中の運轉も安全です。(以上)



先生と講演のクセ (工學會大會)

- 大學教授で中年以上の方は辯が達者で、講演も要領を得て聞き良いが、博士連中でも實際家になると第一に講演の要領が悪い上に、辯が充分に廻らぬから聞いている事も樂でない。演者は尚ほ一層の大汗と思ふ。尤も二年に一回とか、三年に一回位公會席上に立つ人と毎日講壇に立つ人とは同一に出来ない。
- 然し種々クセのあるもので、大河内博士は演壇を右左に往來しながらしゃべる處は、ホームで電車を待合してをる外國人の様だ。
- 京大教授の瀧山氏は常に上半身を前後左右に振り乍ら齒切れの良い語調でニコニコと進める、ガブガブ水を飲む事は此の人第一人者。
- 瀧山氏の聲は可成大で明瞭であるが、それでも古

- 市男には聞き取れないのか、最前列の席で時々耳に掌をあてゝ受音装置をされる。
- 九大の吉田博士は、若い様でもあり、フケタ人の様でもあり、モーニングのズボンを垂らして、初めから終まで演壇の卓を外して古市男の前の方で可成り高聲に講演されたが、それでも古市男は耳に掌をうけられる。
- 建築學會の田邊平學氏の講演振りは、土木學會の瀧山氏の講演ぶりに似て元氣の好いものであつたが水は一滴も飲まなかつた。
- 京大の森田慶一氏は講演中常に右の手に白墨をコロコロ。
- 伊東忠太博士の講演は技術家にして此の人あるかと思ふ哲學味たつぶりの趣味談は大受けであつた。